

ツキノワグマ出没の理由を探る

こさかいちなつ
小坂井千夏（学芸員）

クマ出没！

北海道に「クマ出没注意！」という大きな口を開けた、いかにも怖そうなクマのロゴマークがありますが、今年は博物館のある神奈川県でもクマ出没！というニュースが、テレビや新聞を賑わせています。ただし、北海道に生息するのはヒグマ、神奈川県を含む本州、四国に生息するのはヒグマよりは小さなツキノワグマです。とはいえ、どちらも鋭い犬歯やツメ、山中を縦横無尽に歩き回る太く立派な手足を持っていますので、あのロゴマークのように怒って向かってきたとしたら人間は怪我をしたり、時には死亡してしまうことも事実です。

けれども、クマは四六時中怒っている動物ではありません。のそのそと山の中を歩く姿や（図1）、岩の上で親子そろって気持ちよさそうに寝そべる姿（図2）を見たら、きっと皆さんのクマに対するイメージは変わるのではと思います。ただ、残念ながらクマに限らず、野生動物の普段の暮らしぶりが私たちの目に触れることはほとんどありません。一方で博物館は、彼らがどのように暮らしているのか、どんな姿をしているのか、さらにはどんな骨格をしているのか、皆さんの目で見て、知ることができる場所です。

企画展示コーナーにクマあらわる

生命の星・地球博物館では2012年10月5日から「ツキノワグマ出没の理由を探る」という企画展示を行いました。なぜ、クマが人里に出てきてしまうのか？

本当にドングリの不足だけが原因なのか？ について、野生のツキノワグマを追跡した研究をもとに解説し、併せて毛皮やコグマの剥製^{はくせい}を展示しました。小さなコーナーですが、今回の展示をきっかけにして、多くの人がクマという動物とその暮らしぶりについて知り、さらに出没の理由となる山の植物（クマの食べ物）の特徴について理解を深めていただければと企画したものです。展示は期間限定でしたので、この誌面上で概要を紹介したいと思います。

クマは意外と近くにいます

日本は狭い土地に多くの人間が暮らしています。その一方で、大型の野生動物も多く生息しています。皆さんが知らないだけで、実は市街地のすぐ近くにも彼らは棲んでいるのです。そして、近年では数年おきにツキノワグマが人里に大量に出没してトラブルを起こしています。農作物が食べられたり、人間が怪我をしたり、死亡してしまうこともあります。一方で、地域によっては出没したクマの多くは捕殺されます。1頭を捕殺しても、また次の1頭が出没するかもしれません。捕殺だけの対策ではトラブルの根本的な解消にはなりません。

出没の背景① クマの生物としての特徴

クマは他の大型獣は行わない冬眠により冬を乗り切ります。飲まず食わずの冬眠に入る前、つまり秋には、たっぷり脂肪を蓄える必要があります。秋のク

マ達は1日の活動量を増やし、必死に食べ物を探し回っているようです。

出没の背景② 冬眠準備に欠かせないドングリ

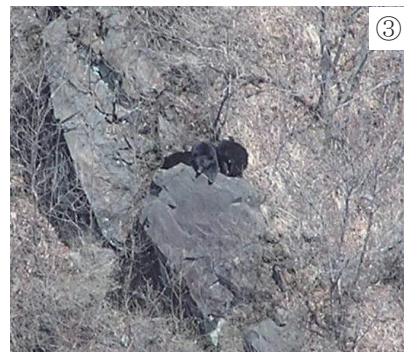
ツキノワグマが住む日本の森に多くあり、冬眠準備、つまり脂肪を蓄えるのに都合の良い食べ物はドングリ類です。秋に実る他の果実よりも効率よく脂肪を蓄えることができます。ただし、地域によってクマがよく食べる「主食ドングリ」の種類は異なります。したがって、まずは自分の住んでいる周辺ではどのドングリを主食としているかを知るこ



①



②



③

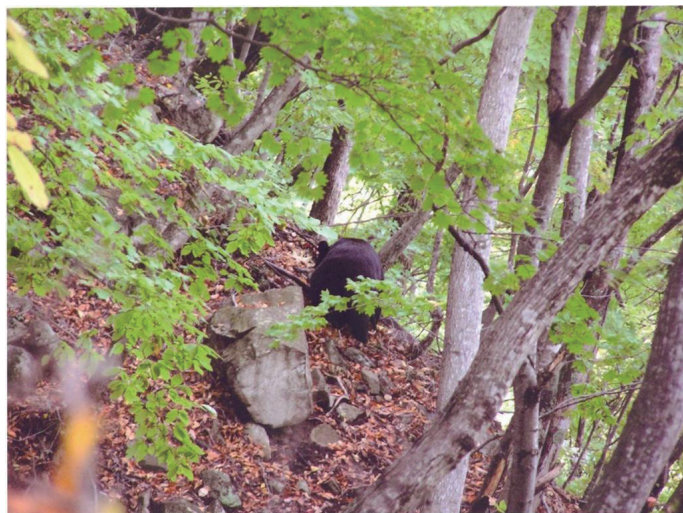


図1 ドングリの森を歩くツキノワグマ。

図2

- ① ある早春の日、この写真のどこかに親子のクマがいます。
- ② ①の写真中央の黒い点をアップすると...! この黒いかたまりは...!?
- ③ 午後13時、親子（母グマ1頭、1歳の子グマ2頭）で岩の上でお昼寝。



図3 麻酔で眠らせて GPS 首輪を装着。タオルは麻酔中に目を傷つけないようにするためのもの。胸のツキノワ模様は1頭1頭違う。ほとんど見られない個体もある。

とが大切です。主食ドングリの実りが悪い、つまり結実する量が少ない年にはクマ達は遠くまで「出稼ぎ」に出かけるからです。そして同時に、主食ドングリが少ない場合の替わりとなるドングリやドングリ以外の果実が何かを知ることも大切です。出稼ぎ先とこれらの「ドングリの分布標高」は深く関わっているのです。なお、普段クマ達がいる場所周辺に多い種類のものが主食ドングリになると考えられます。

出没年は低標高に出稼ぎ

北関東（栃木・群馬県）で GPS を装着したクマ（図3）の追跡を行ったところ、彼らは出没が多い年、つまり主食ドングリの実りが悪い年には、オスで 97 ~ 193km²、メスでも 28 ~ 103km²

に及ぶ広い範囲を移動していました（図4）。さらに、クマ達の出稼ぎ先は低い標高の場所だったことも分かりました（図5）。標高の低い場所にはコナラやクリなどのドングリが多く分布しています（図5）。出没が多い年、これらのドングリはこの地域の主食ドングリであるミズナラより実りが良かったのです。クマ達は「次の手」として、いつもとは違う種類のドングリで冬眠の準備を始めることにしたようです。

つまり、クマ達は「山に何も食べ物がない」からではなく「標高の低い場所に替わりの食べ物がある」ために長い距離を移動して来ることが分かりました。しかし、低標高地には私達、人間も多く生活しています。クマ達は最初は主食の替わりになるドングリが目当てでも、

人里でカキやクリ、田畑の作物などを見つければ、その美味しさに病みつきになるでしょう。人間の食べ物は山の食べ物より大きくて、甘くて、栄養満点です。冬眠の準備に必死なクマ達は、何度も何度も食べ物のある場所を訪れます。

どのような対策や知見が必要か

ここまでで紹介したのは北関東でのツキノワグマの行動を追跡した事例です。しかし、神奈川県でも同じような状況が起こっている可能性は十分にあります。出没は決して異常なことではありません。クマ達が元から持つ能力を発揮すれば、当然起こることなのです。ですから、人里に来てほしくないのならば、クマの食べ物になるものを彼らに食べられないよう徹底的に管理する必要があります。また、その地域のクマの食べ物や行動を把握し、さらに食べ物になる植物や農作物の分布の特徴を山地全体や隣接県（クマに県境は関係ありません）も含んだ広い視野で把握して対策をとることが重要です。

おしまいに

ツキノワグマは 30 万年 ~ 50 万年前頃の氷河期に大陸から日本にやってきたと考えられています。昔からクマと人間の間にトラブルはあったと思いますが、何とか今日まで同じ日本で暮らしてきました。しかし、現代の日本には、クマのことをよく知っている人間があまりにも少ないように思います。相手のことを知らなければ、どう付き合えばいいのか分かりません。これからも研究を続け、彼らと上手く付き合うコツをお伝えしていきたいと思っています。

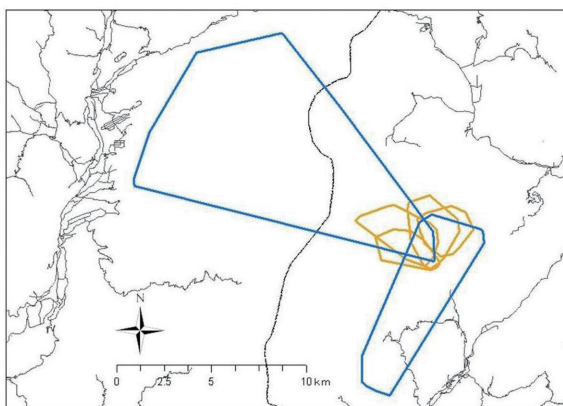


図4 ツキノワグマが移動した範囲（メスの例）。線で囲った部分が1頭のクマが移動したエリア。出没少ない年（オレンジ）の面積は5 ~ 8 km²。

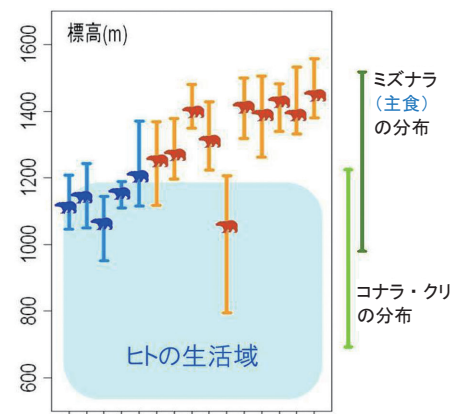


図5 ツキノワグマが利用した標高とドングリの分布。